

『今が、歴史を創る時』 個々人がつむじ風を起こそう

第14回 原子力発電と火力発電の石油備蓄を考える (毎月掲載)

永田 隆一

(今回は弊社取締役会長、永田幸治の寄稿文です)

現在の東京電力の供給量は、3280万kWであり、「計画停電」という施策を取っている。火力発電が数カ月で戻れば、4100万kWまで復旧する。しかし、最近の夏場のピーク時の需要は、6000万kW。原子力発電1基が100万kWの発電量ゆえ、原子力発電19基分の不足である。しばらく供給不足は解消されることはない。

《プロローグ》

昭和4年1月2日に、私は広島江田島で生を受けた。子供のころから私の周りには、海があり、子供心に、「ああ、将来、私は、きっと海に関係をした仕事をするのだろう」と漠然と考えていた。

私の父、永田森太郎は、私が16歳のとき、「もう少し、頑張ってくるけえのお」と、日本海軍軍属として、山霜丸(6776t、3100馬力)に乗り込んだ。しかし、1944年2月23日、米国の潜水艦「Tang」に雷撃を受けて、ロタ島北西100kmの場所で、沈没。帰国の祈りはかなわなかった。

私は、広島に墓を建てたが、父、森太郎の骨は、そこにはない。

さて、私は、今は82歳の翁となり、79歳になる妻と2人で、東京の

郊外で、穏やかに暮らしている。

愚息が、東京の神楽坂で、会社(アンカー・ビジネス・システムズ株)を経営しており、週に4日、会社へ入社している。まあ、これも、よいボケ防止となるようで、まったく世界の違う、エレクトロニクス・半導体業界の方たちと、語り合うのも楽しいものと前向きに取っている。後輩たちも、多忙の中、ときどき神楽坂へ来社してくれて、昔を思い出しながら、ご一緒する昼食は楽しいものである。

《偶然の出会い》

私は、人生とは、偶然の積み重ねであると思う。出会うべくして…など、いわれる方もおられるが、それはあとで、理由をつけたようにしか、どうしても思えない。

私は16歳で、父を戦争で亡くし、20歳の時、母、ハナを病気で亡くし、若いころから、人生に対して斜に構えて、いつもどこかさめた気持ちがあり、そのように生きてきたように思う。

修道中学へ進み、宇部高専(現山口大学)で土木を学び、広島への原爆投下を体験した。

昭和24年4月、21歳のときに、運輸省へ入省した。北松港工事事務所が最初の仕事場であった。翌25年に測量士の資格を取り、第四港湾(下



永田 幸治氏

関本局)にいるころ、妻、貴美子と結婚した。長崎(松ヶ枝)へ転勤し、その後、熊本県八代港で4年。なんとなく仕事が分かってきたころ、私は岐路に立たされた。

運輸省(現国土交通省)の3人の局長が、「天下りはしたくない。これからは、迅速に動ける民間のコンサルティング会社が必要になる」と、JPC(日本港湾コンサルタント)を旗揚げした。当時、私は、山口県宇部港建設専門官であり、先輩の内田さんから「永田君、一緒にJPCの旗揚げに馳せ参じようではないか」と誘われて、腹を決めた。私は、34歳で、袴(かみしも)をぬいだ。JPC旗揚げ後、厳しい先輩の指導の下、36歳で、技術士(建設部門)の資格を取った。

初めて、東京へ出張をした時、私は、靖国神社を参拝した。私の父森太郎が、祀られている神社だからであった。涙がでて、涙が出て仕方なかったことだけを鮮明に覚えている。

《男子一生の仕事》

JPC は、日本の高度経済成長の波に乗り、成長を続けた。「人間は、仕事を通して成長する」という言葉があるが、まさにそれを実践したように思う。

時が経ち、52歳になった私は、上司の山本隆一さんに、インドネシアへ海外開拓の仕事へ連れて行かれた。「スマラン・ポート・プロジェクト」である。山本さんがプロジェクト・ディレクター、私はプロジェクト・マネジャー、総勢15人のメンバーであった。これが、私に、「海外という機会（オポチュニティ）」に開眼させることになった。

インドネシア政府が、我が日本国からの円借款をベースにスマラン港の整備のプロジェクトを発表した。私は、「JPC 創立初の大型海外プロジェクト」をどうしても取りたく思った。今は亡き鮫島会長に、「どうしても、スマランの仕事を取りたいです。行ってまいります」と挨拶をしたところ、鮫島会長は厳しい目をしながら微笑み、「永田君、男として悔いのない、生涯に残る大仕事をやって来い。何かあれば俺に言え。直ぐに飛んで行ってやる」と送り出してくれた。

強力な競争相手のP社は、はや



エンジンのない巨大備蓄船

くから海外進出を果たしていた、もちろん落札の筆頭候補であり、JPC はかなわないだろうとの下馬評であった。しかし、勝負事は、下駄を履くまでわからないと自分に言い聞かせて頑張った。

今思えば、きっと幸運の女神が微笑んでくれたのであろう。結果は、JPC が主要な部分をことごとく落札できたのであった。仲間とともに丁寧にしっかりと仕事をこなした。このインドネシアに4年駐在できた体験は、私にとっては「かけがえない、人生の宝」となった。

その後、タイのソクラ港、ナイジェリア、中東と転戦を展開した。JPC の取締役を仰せつかり、長崎県上五島の洋上備蓄のプロジェクトをまかされた。これが最後の大きなプロジェクトとなった。

《洋上備蓄の壮大なロマン》

「洋上備蓄」とは、エンジンの付いていない巨大船（長さ390m、幅97m、深さ28m）をつくり、それを過去の自然災害を丹念にレビューして、十分な安全率をかけて設計して、港につないで備蓄するのである。その船を5隻並べて、合計440万klという、途方もない石油を備蓄するのである。しかし、この量は、日本で消費する石油の6日分にしか満たない。

世界に類をみない、洋上備蓄のプロジェクトで、4年、上五島町に拠点を構え、最後のご奉公を成し遂げて、70歳で退職した。

今回の震災で、日本の電力政策が



現在の上五島洋上備蓄基地

大きく見直されることになるであろう。その際、洋上備蓄という日本の高い技術が見直されるかも知れない。そんなことを考える。

《仕事が人を成長させる》

今、考えてみると、仕事とは、日々の仕事を丁寧にこなすこと。これが重要である。そして時として、幸運の女神が微笑んでくれて、大きな仕事を与えてくれることがある。そのときは、「身の程を忘れること」、いまだ、誰もこなしたことがないのである。ひるんではいけない、挑むことが肝要だ。

部下の育成は、任せること。本人に志があれば育つし、そうでなければ埋もれていく。簡単なことだ。

家族について、私にはコメントできない。すべて、女房任せであったからだ。私の遅い妻は、「私の仕事は妻であること。そして母であること」と言い切る。かなわない。

廣島の海の側で、生を受け、運輸省港湾局・JPC という海を舞台に働くことができ、今、神楽坂で、アンカー（Anchor・碇）・ビジネス・システムズという会社へ入社している。

もちろん、偶然の賜物ではあるが、人生、なかなか楽しいものじゃないかと、思ったりもする。

（毎月掲載）